

## 表面金利の裏をみる (高金利型定期預金の陥穽)

最近、高金利を謳った定期預金が人気を呼んでいるらしい。先日も新聞に、「高金利定期預金 住信、2兆円突破」という記事が出ていて驚いた。2年前に発売した「グッドセレクト」というネーミングの定期預金が人気を博し残高が急増しているというのだ。

この「人気」商品は、中途解約出来ない代わりに預金金利が通常の定期預金の2倍程度に設定されている。HPで調べると、2年物で0.07%、3年物で0.12%、5年物で0.25%となっていた。私にはこの金利が「高金利」には思えなかったが、同行の通常定期と比べると2倍位高くなっているのは事実だった。

結局、住信の場合、定期預金の満期を迎えた預金者が、行員に「当面解約しないのならこの新型定期の方がずっとお得ですよ」とか何とか勧められて、「まー、いいか」とこの預金に切り替えるから残高が急増している、というのが私の下した観測である。5年間解約できず拘束される定期預金を、利率0.25%程度で「高金利」と称するのはおこがましい。尤も、高い低いは比較の問題、感覚の問題だから、私ごとやかく云う筋のものではないが、そんな風に思った。

前述の住信の「高金利」預金だけでなく、他にも「高金利」を謳った定期預金が幾つかの銀行から発売され人気を博している(らしい)。新聞等でも時折広告が出ているのでご存知の方も多いと思うが、これも「高金利の秘密」を理解しておかないと後で後悔しかねない要素を持っている。

何故後悔しかねないか、新生銀行と東京スター銀行の実際の商品を例に説明してみる(両行に何の恨みもありません)。

先ず、新生銀行の「パワード・ワンプラス」という名の定期預金だが、この預金の金利は「最初の5年間は1.5%、6年目以降は1.6%」となっている。但し、満期は一応5年となっているが、銀行の判断で期間延長が決定されれば満期は10年に延長される特約が付いている。そして、その間途中で解約はできない仕組みとなっている。

一方、東京スター銀行が派手に宣伝している「右肩上がり円定期」は、「最初の3年間は1.

35%、次の3年間は1.45%、その次の4年間は1.75%」と3段階で上がっていくのを売り物としている。この預金も、一応期間は10年であるが、銀行の判断で満期を6年に繰り上げる特約が付いている。勿論、中途解約はできない。すれば違約金が発生し、金利は付かず元本割れもあり得るとしている。

どうだろうか。これだけの説明では分かりにくいと思うが、少なくとも現在売られている一般銀行の定期預金金利と比べるとかなり高くなっているのは事実である。

調べたら大手銀行の3年定期は0.07%、5年定期は0.1%程度である。確かにそれと比べて魅力的な金利かもしれない。バット、しかしである。美しいバラには棘がある、という現実はここでも通用する。勿論、大手銀行の顕微鏡金利を擁護する積もりは毛頭ないが、簡単にこの種の高金利定期預金を申し込むのは待った方がいい。

何故、「パワード・ワンプラス」や「右肩上がり円定期」は通常定期と比べて金利が高いのだろうか。ここに疑問を持つ必要がある。その疑問を解く鍵が「権利の売り(=義務の発生)」という行為の介在である。

預金者は、預金成立と同時に「満期を延長される」、あるいは「満期を短縮される」義務を銀行に負うことになる。義務の対価が預金金利上乗せとなって預金者に還元される。結果、将来預金金利が上昇し、解約して通常定期に回せばもっと高い金利が得られる時が到来しても、この預金者は解約できず指を加えて見ている他なくなるのだ。

預金者の「権利の売り」の向こう側には銀行の「権利の買い」がある。通常、売りと買いは双方が合意した価格で成立する。この特約付き預金の場合、その価格は提示されている金利に他ならない。その価格(金利)が高いのか、あるいは低いのか貴方は判断出来るだろうか。私にはできない。多分、貴方もできないと思う。その意味で、この種の預金をやるのは一種の「賭け」なのだ。

これからも金利が低いまま推移すれば「賭け」は成功だが、上がれば失敗となる。このように、権利の売買といったデリバティブを使った商品は「誰かの儲けは誰かの損」で成り立っている。完全にゼロサムの世界である。それを承知して預けなければ後で臍を噛むことになりかねない。